
カガヤケルミライ

居待月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カガヤケルミライ

【Nコード】

N1307P

【作者名】

居待月

【あらすじ】

中堅社員前島忠夫には気がかりなことが三つあった……。

前島忠男には最近気がかりなことが三つある。

一つは次女の進学のこと。これは本人に任せているが、心配はないと高校の担任にも長女にも言われている。実際そうなのだろうか、これは単なる杞憂に過ぎない。それでも親の感情として心配だけは尽きないのである。

二つ目は自分の体調のこと。学生時代は——と言っても三十年も前だが水球で鍛えた体力にはかなりの自信があつた。二十代、三十代のころはまだいい、しかし四十代も後半になって、五十代に入るところになるとさすがに肉体的な衰えを感じざるを得なくなつた。それは無理もないことだがショックを受けずにいられなかつた。それに伴つて体型にも変化を生じ、今時流行りのメタボなんとかの範疇に入ろうかというところに差し掛かっている。そう長くもなく信楽焼きの狸のような体型になってしまうだろうということも前島の想像には難くなかつた。

そんなこともありながら、前島が今最も気にしているのは目の前の男のことだつた。矢野恵一という。入社して二年目でまだ新人と言つてもいいくらいだが、やはり前島から見ると青いという印象が抜けない。その若さは昔の自分を見るようで懐かしいような、また一方で危なっかしいような思いも同時に覚えてしまうのであるが。

「前島さん？」

声をかけられて物思ひの世界から引き戻される。帰りがけに酒に誘つたのは別に説教をしようと思つたわけではない。それでもさつきからやや仕事に対しての指導のようなことに話題が逸れていつていた。矢野はどういう人間か。そういうことを考えていてしばらくぼうつとしていたようだ。怪訝そうな矢野を目の前にして、思わず「お前のことで悩んでるんだ」と言い出しそうになつたが、余計なことを言うわけにもいかず口をつぐむ。「何でもない」と言つとさ

らに不思議そうな顔をしたが、前島もなんとも言えない気持ちのまま言葉を繋げられないでいた。

毎日毎日営業と一緒に歩いていればどう変わってくるかというのもわかるというもの。ここ一年経って、入社したころよりはまともになったものの、未だに礼儀作法に関しては不得手な面が矢野には目立つ。取引先とのやりとりの中でも時折冷や冷やさせられることがまだあるし、隣で見ている前島にとっては少々苛立ちを伴うものだった。

「矢野、お前はもう少し謙虚さと言うものを覚えたほうがいい」
「そうですかね？」

営業まわりというのは相手先の印象も大切なものだから、軽薄そうな感じを与えるそういうへらへらした顔もするなとよく前島は嗜めるのだが。

「その笑い方もだ」

「あ……、はい、すみません」

一応素直に矢野は聞く。聞き分けはよいほうなのだ。しかし言ったことがそのまま実践されるかどうかは別の話、何度注意しても直らないということもある。

「お前もようやくというところだが、一応は様になるようにはなってきたな」

「一応ですか？ 厳しいなあ」

前島は嘘は言っていない。問題のあるようなところもあるが、基本的に矢野は優秀なのだ。実際前島より口がうまいかもしれない。たまに商談を任せるとトントン拍子に契約まで持ち込んでしまうことがある。将来的には相当のやり手になるだろう。仕事のことに關してはあまり心配はない。ただ問題なのはやはり性格と言うか立ち居振る舞いの面。それはいずれ経験をつむことと本人の努力でなんとか直っていつてくれればと前島は思っている。

それはそれとして、前島は別に気になりだしていることがあった。これもまた矢野のことなのだが本人がどう思っているか一度は聞い

てみたいと思っていた。前島自身もどう切り出すか迷っていたものの、とりあえずは遠まわしに漠然としたところから攻めてみることにした。

「矢野、お前最近悩んでることとかあるか？」

「はい？」

これもまたおかしいな表情をされた。いきなり何を言い出すのかと思われたかもしれない。しかしよく頭が回らなかった前島はこんな言い方しか思いつかなかったのだ。

「悩みですか……、給料が低い」

「ほかに？」

「ほかですか？ あー」

あぐりと口を開けてしばらく考えている様子。元々あまり悩みも無さそうに見える男だが。

「出会いがない」

「そうじゃなくてな、体調のこととか」

「俺は健康ですよ。前島さんこそ大丈夫ですか？」

「俺はこれでも昔は鍛えてたからな。体型が変わってきたのは年のせいだぞ？ 別に不摂生の結果じゃない」

そんなことは言われたくはない。確かに矢野のような若い者の目からすれば、前島はそこらにいる中年と大して変わらなく見えているのかもしれない。それでも大丈夫かと言われるほど言うことの聞かない体ではないのだ。

少しだけムツとしたが、どうも矢野本人は前島の思っているようなことを抱えている節はない。

「それ以外にはないのか？」

「たとえば何です？」

「たとえばだな……」

そこで前島は言いよどんでしまった。はつきりと言うべきなのか。その方が矢野のためになるのかもしれない。早くから対応していれば後になって手遅れを感じ絶望するようなこともなくなるだろうか。

ら。

「……頭とかだな」

それを聞いた瞬間、前島の顔を見ていた矢野の視線が上へと動く。前島の頭を見ている。

そうなのだ。前島は五十を少し過ぎたばかりだったが、もうすでに頭髪のほうが年に似合わないほどに抜けてしまっている。思い返せば若いころから何かとストレスを感じては抜け毛が増えるような生活を送っていた。精神的なストレスに弱く、そういったことは三十になっても四十になっても変わらなかった。若いころは大丈夫だと思っていた。父も祖父もどちらかといえば老境に至っても変わらず、ただ白髪になるばかりだったのだから、その家系から言っても自分も例に漏れず、世間で言うような禿げることに悩むわけもないだろうと高をくくっていたのだ。しかし、前島の髪はぬけおちるばかりだった。妻にも二人の娘にも「若禿げ」などと言われたこともあったが、そのときの衝撃と言ったらなかった。

矢野の目が明らかに泳いでいる。前島も自分の一言が場をおかしな空気にさせてしまったことを感じていた。そもそも禿げている自分がその話をしかけたということは、矢野にとってはどう答えればいいかわからないデリケートな問題として受け取らざるを得ないのではないか。

ここはなんとか、誤魔化して和やかな雰囲気に戻さなくては。そう思うや否や前島はふっと笑い、「冗談めかした言い方で話題の方向を変えようとした。」

「あんまり若いうちから悩みを抱え込めると俺みたいに禿げるぞってことだ。お前も気をつけろってな」

そう言う矢野の顔にも安心したように笑顔が戻った。なんとか場の雰囲気は取り繕えたが、矢野にどう思われたかわからない。前島は内心、変なことをしてしまったと後悔していた。

「なんですか？　うちは三代続いて父も祖父もその前も禿げる家系なんかじゃありませんからね。俺も大丈夫だと思ってますけど。そ

れでも前島さんの言うとおり、悩みがあつたら溜め込まないようにしますよ」

自分だってそう思っていたとは言いたくても前島は言えない。そこまで同じなら、もしかしてこいつも自分と同じ道を行くのではないかという予感が更に強まる。

「お前は俺に似てるよ」

ぽつと出た言葉に矢野が間抜けた顔になる。

「え？ どこがです？ やっぱ仕事に関して才能があるところですか？」

なんとも答えづらいところを笑って誤魔化す。自分だからいいものの、調子に乗るところはやはり直してもらいたいものだ。

「出世はするだろうな。ただそれまでに直さなきゃならないところは山ほどあるが」

しかし前島はつくづく思う。矢野はやはり若い頃の自分にそっくりだ。おそらくこれから行く道も、あるところでは同じような道筋を辿ってくるだろうと。自分と同じ立場に立ったとき、その時矢野は何を思ふのだろうか。それは本人にしかわからないと思うが、そのときは優しく迎え入れてやろう。

前島には矢野の歩く明るい道が見えるようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1307p/>

カガヤケルミライ

2010年11月25日08時25分発行